

平和通り(那覇市)

国際通りの旧三越前から牧志公設市場に抜ける通りで、かつて通り沿いにあった映画館「平和館」が名称の由来となっています。周辺の商店街や壺屋焼で知られる壺屋などにつながり、観光ルートとしても人気です。1981年にはアーケードが設置されて利便性が高まりました。

復帰の頃



現在

天久高台から見た新港ふ頭地区(那覇市)

那覇港の新港ふ頭地区は、沖縄の物流拠点として復帰前から埋立事業が進められました。1986年には泊大橋、2011年には那覇うみそらトンネルが開通。2019年5月には那覇港総合物流センターが開業するなど、さらなる発展に向けて整備が進んでいます。

復帰の頃



現在



守礼門周辺(那覇市)

1950年5月、戦禍で壊滅した首里城跡に琉球大学が開学し、復帰当時の守礼門周辺には多くの学生らが往き来していました。1992年に首里城正殿が復元されてからは多くの観光客が訪れるようになり、守礼門の手前に整備された「首里杜館(すいむいかん)」では首里城公園に関するさまざまな情報が発信されています。

復帰の頃



現在



宇地泊川河口(浦添市/宜野湾市)

中城村北上原を源流とする宇地泊川の河口に位置する牧港は、琉球王国時代は船の出入りの多い賑やかな港として知られていました。2018年3月には西海岸道路が開通し、那覇空港から沖縄コンベンションセンターまで直接アクセスできるようになりました。同地区は国道58号と西海岸道路が接続する地点として重要な役割を果たしています。

復帰の頃



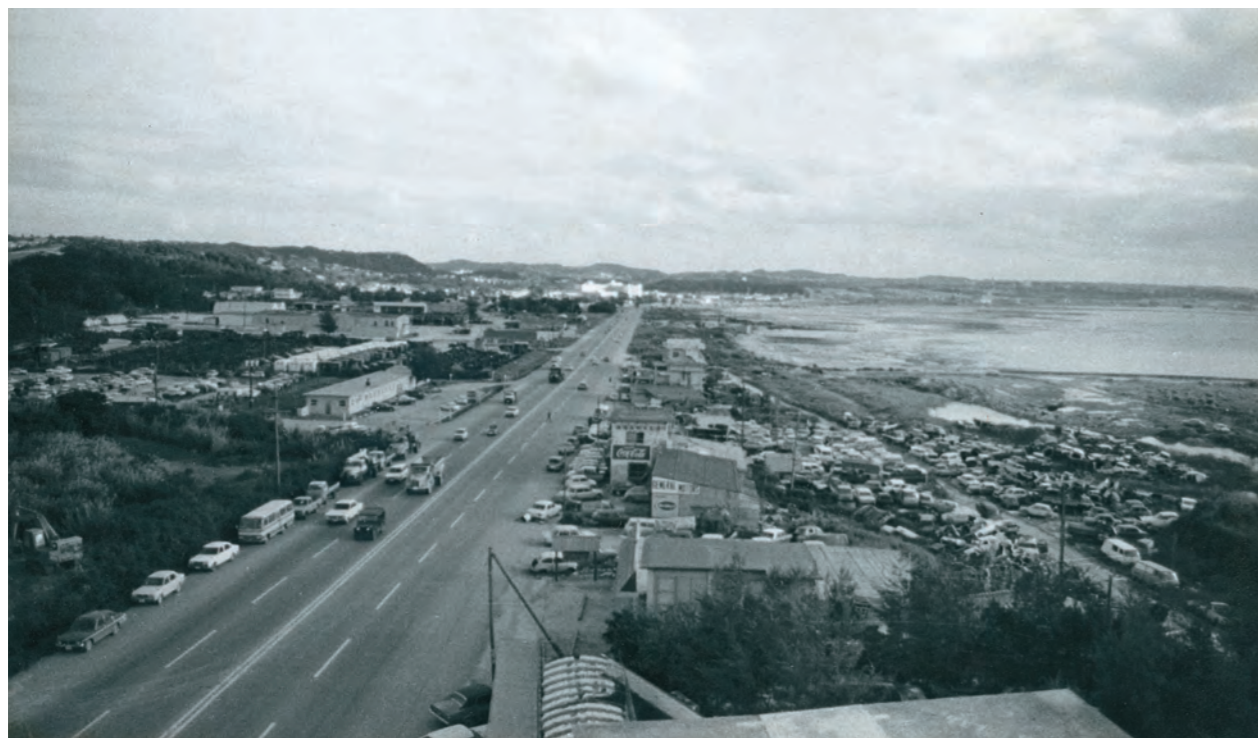
現在



美浜から北前にかけての西海岸(北谷町)

北谷町では、1981年に返還された米軍ハンビー飛行場やメイモスカラー射撃場の跡地・埋立地に商業施設や住宅地を備える都市環境が整備されました。2019年に撮影された下の写真中央部には、1990年代から開発が進められた「美浜タウンリゾート・アメリカンビレッジ」が、右下には2013年に完成したフィッシャリーナが見られます。

復帰の頃



現在



泡瀬海岸(沖縄市)

現在の泡瀬漁港付近から現沖縄市海邦町方面を望みます。現在は海岸線が埋め立てられ、泡瀬漁港に併設された食堂は水揚げされた海産物を中心に料理を楽しむ地元客や観光客でにぎわっています。

復帰の頃



現在



### ひんぷんガジュマル(名護市)

名護市のシンボルとして知られるひんぷんガジュマルは樹齢が300年を超えるとされ、1997年に国の天然記念物に指定されました。通常、屋敷の正門と母屋の間に設けられる衝立状のひんぷんは、外からの目隠しという役割に加え、悪霊の侵入を防ぐものとされています。名護のまちの入口に鎮座するこのガジュマルは、文字どおりひんぷんの役割を果たしていると言われています。

復帰の頃



沖縄半世紀の変化

現在



### 宮古空港ターミナルビル(宮古島市)

1943年に旧日本軍により建設された宮古空港(海軍宮古飛行場)は戦後、米空軍の管理下で宮古島国際空港として機能していましたが、1968年に初代ターミナルが完成。復帰による返還後は滑走路が延伸され、97年には現在のターミナルビルが供用を開始しています。

復帰の頃



現在



那覇空港(那覇市)

旧日本海軍小禄飛行場として1933年に建設された那覇空港は戦後、米軍の管理下に置かれました。その後、1947年に戦後初の民間機が就航。復帰当時のターミナルビル(旧国内線第2ターミナルビル)は1959年に完成したもので、長年にわたり沖縄の空の玄関口として親しまれました。現在の那覇空港国内線新旅客ターミナルビルは、1999年に竣工したものです。

復帰の頃



現在



泊港周辺(那覇市)

復帰当時の泊港は、主に慶良間諸島や久米島、南・北大東島などの離島で暮らす人たちが、その生活物資を運ぶ拠点として多くの船が出入りしていました。その後、増加する観光客に対応しようと海運会社や一般企業、リゾートホテルなどが入居する現在のターミナルビルが1995年に落成。隣接する広場ではさまざまなイベントが開かれるなど、多くの人が行き交うようになりました。

復帰の頃



現在

